

親鸞さまの

## 【本文】

てんりんおう  
転輪皇の王子のおう  
皇につきみをうるゆるゑにこんさ  
金鎖をもちてつなぎつつ

牢獄にいるがごとくなり

## 【意識】

てんりんじょうおう

「転輪聖王（仏教を守護する王）に王子がいて・・・とお釈迦様はお説きになり、こう続けられました。」

「その王子が父王に仇なす行いをしたとしましょう。その罪故に、

衣食住全てが贅沢に整えられている部屋に、金の鎖で手足を縛られるのです。では、王子はそこに身を置くことを望むでしょうか」と。

これを聞いた人は、「いや、きつと牢獄のようなその場所を出たいと望むでしょう」とお答え申し上げました。

## 【私の味わい】

他人の評価付けが全て、そんな世の中になってしまったら。ある映画のお話です。

今や、お店や商品に星1つから星5つ（最高）までを評価する事が日常的になりつつありますが、この映画では人間一人一人に至るまでその全てが評価の対象になっていきます。贈り物をしてくれたから星5、気に入らなかつたから星2、話がつまらないから星1つ。そうやって他人の主観的な評価に24時間さらされ続け、星平均4以上でないところ、人が組めない（社会的に望ましい人物ではないから）、友達付き合いから排除されるなど、人の社会的な位置づけが決定されてしまうのです。しかし、人間は失敗することもあつて、誤解されることだつて、面白いことが言えない人だつています。人当たりがよく、ユーモアのある成功者（一生失敗しない）向けの世の中になる、ということなんです。

この物語の興味深いのは、そのような息苦しい社会であるという本質を主人公は自分では全く気付くことができず、むしろ高評価人間を目指して必死になり、そんな日常に満足すら覚えているということなんです。人の評価とは、仏教的に言い換えれば煩惱（自己中心性）の主観に過ぎません。煩惱が煩惱を評価し、煩惱を抛り所にした煩惱の最大公約数が世の中になる。これは、評価付の問題だけでなく、人が選ぶ幸福観、人生観、生命観、死生観など全てに及びます。そんな世に生きる全ての人、囚われ人と気づかない私に向かつて、阿弥陀様は「南無阿彌陀佛」、この阿弥陀仏を抛り所になさい、と仰つています。煩惱（自己都合）を、煩惱の世を抛り所にするこゝとなかれ、と。（悠水）